

「茶旅」

”こぼればなし“

コラムニスト 須賀 努



台湾茶の歴史を調べていると台湾農林という会社が出てくる。この会社の前身は三井物産と書かれており、実質的には日本統治が終了した後、三井農林が経営していた茶工場などを接収し、その後の台湾茶業の発展に寄与してきた。最近では日本統治時代に紅茶作りをしていた三峽の大寮茶廠や大溪の大溪茶廠を観光地化するなど、その豊富な土地所有を一部には不動産会社と押揃われてもいる。

日月潭のすぐ横、魚池の日月老茶廠という茶工場がある。1950年代に台湾農林が建てた物で、紅茶輸出の全盛期に、このあたりの茶葉を集めて大規模に紅茶作りをしていたはずだが、今ではやはり観光茶廠を謳っている。

台湾農林は上場会社であることから、収益を重視しなければならぬ面はあるとはいえ、本来の茶業はどうなっているのだろうか、と迷ってしまつこともある。

そんな中、先日台湾南部の屏東県に行つてきた。目的は台湾最南端の茶畑、港口茶の産地を再訪することだったが、その帰りに屏東市にも寄つてみたのだが、同じ県内だから近いだろうと思つていたが、台湾最南端の墾丁ビーチから車で2時間近くかかってしまい、屏東県の広さを認識した。

その屏東市内から車で少し行った内浦のまっ平な土地に、台湾農林の新しい茶園は存在した。周囲に小山がある程度で、その一帯は南部の強い日差し

を浴びていた。元はパイナップル畑だったというその土地を、約30億元(約110億円)で買収して、全く新しい茶園を作ろうとしていると聞き、目を疑う思いだった。

台湾茶業の状況については、これまで何度か報告してきたが、関係者の間で、その危機感が折に触れて述べられている。将来の方向性についても、『高山茶などの高級茶を更に作り続けていく』という考え方もある中、現在ベトナムやインドネシアから輸入を余儀なくされている茶飲料用の茶葉を、台湾内で作るべきだという意見は聞いていた。

今回訪れたこの屏東の茶園は、まさに輸入茶葉に代替するものを作るためにあるようだった。総面積は約500ヘクタール、まだ第1期が始まつたばかりだったが、以前見た中国貴州省の中国茶海を思い出させる、四方が茶畑という規模だった。暑い地域なので、一般より茶樹の生育も早く、2019年にも茶摘みが始まるらしい。

金萱、四季春、紅玉、アッサムなど、多様なニーズに合わせた品種を栽培して、多くの購入企業の要望に応える予定だという。現在台湾内の茶葉生産量、1.5万トンに対して、この茶園で将来的には30000トンを新たに作り出すというのだ。実に20%の増産になるとは凄い。これらが輸入代替になる。

平地での茶作りには、乗用機など日本製機械が早くも活躍して始めている。単に大規模茶園を作っても、労働力などのコスト面ではベトナムやインドネシアに全く敵わない。そこで日本製機械を導入して、生産効率を大きく高めようという戦略も見えて取れる。『日本製の機械は非常に高額だが、それに見合う価値がある』と言い、長期的展望で、使用を開始した。

ただいくら生産コストを抑えても、ベトナム産より安くなる訳ではない。経済合理性から言えば、安い方の茶葉を使うはずだから、これまで通り、茶葉の輸入は続くのではないだろうか。



写真:第1期茶園で動く日本製乗用機

そんな疑問には『確かに価格では勝てないが、近年の輸入茶葉への不信感がある』との答えが返つて来た。農業問題などには台湾も敏感になっており、使用されている可能性があるものより、台湾内で作ったものの方が安全だ、という機運がある。

更には、台湾内の飲料メーカーからも『輸入物だけでは、何か問題があつ

た場合、リスク分散が出来ないので、是非島内で作つて欲しい』という要望もあるのだとか。現在でも南投県名間などで、飲料茶の原料は作られているが、規模的には足りていないという。台湾中部と南部での分散が図れるメリットもある。

それにしても大胆な計画を立てたものだ。つきり台湾政府の支援、指導などがあるものと思つていたが、『それは一切ない』と言い、純粋に企業としての決断だと聞き、これまた驚く。台湾農林ほどの規模の企業だから、台湾全体の状況を先取りして、先行投資が出来たのだろうか。この計画は日本茶業の現状も参考に策定されたらしいが、日本と比較してどうなのだろうか。

高級路線、こだわりのお茶だけではなく、大衆路線、本当に必要とされているお茶が果たして作り出され、そして消費者に支持されるのか、この壮大なプロジェクトの結果に今後大いに注目したい。(すが つとむ)